

(1) 山と高原地図「飯豊山」から部分 (マップル)

「御坪・御沢分れ」とある辺が穴堰である。「雪渓コース」は、穴堰取水口辺から御沢添いに登る登山コースになる。

(2) 「飯豊山穴堰記」(林泉文庫・米沢図書館蔵) 添付絵図

左下の滝が「抜口」から白川支流へ流れ出る滝で、滝音が聞こえる

(3) おきたま歴史探検 (山形県 HP, 山形県置賜農村計画課編集)

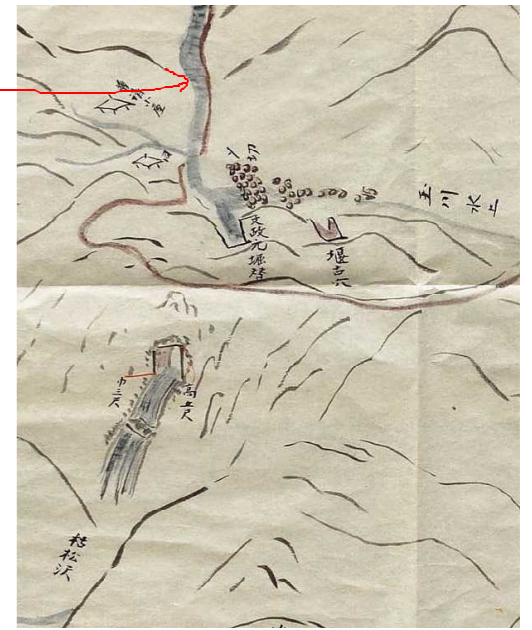
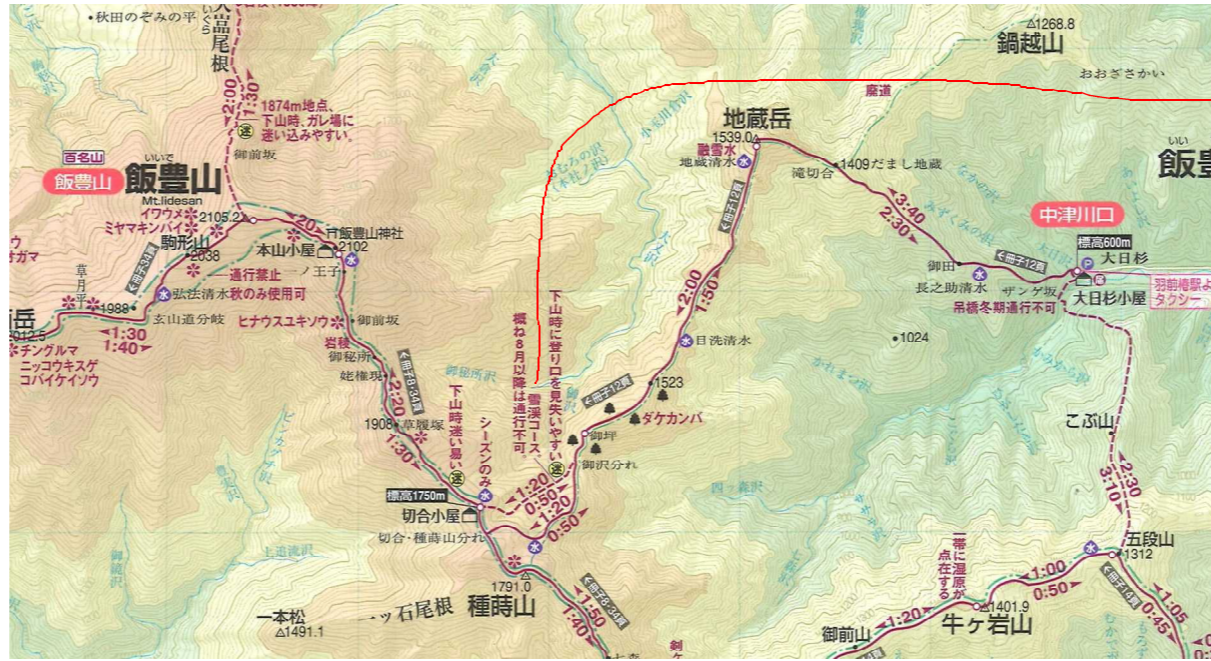
(4) 「長堀堰史」 p39 ~ 42 から抜粋

「村史なかつがわ」(S35 発行) からの引用部分である

(5) 「長堀堰史」 p314 ~ 315

「旧長堀堰史」(竹田源右衛門著, S38 発行) の復刻所収部分

「長堀堰土地改良史・長堀堰史」は長堀堰史編纂委員会編 S53/8 発行



(1)

(2)

(5)

○ 文久三年亥大旱魃の事

文久三年大旱魃、五月六日大塚村より人を遣し寄越し、旱魃にて田水無之に付き、昨日城下に罷登り御代官所より、御用人様三人御下り、中郡御役場よりも役人閣様御出被下、上堰より水下げ候間、長堀堰も御受け通し被下様、御立会被下度と申来り、長堀堰頭にて相談、堰口に詰め集り、持ち居るも夕方迄に、藩よりの役人誰も見えず、御横目様は手ノ子泊りとの事を申す、歌丸肝煎、大塚の肝煎、東大塚の欠代等の云ふ事なり、上堰より水引下げ候間、長堀にても御受け被下と云ふに付き、皆々立会い、四尺位、相開きたり、然るに藩よりの役人御出役、櫻井幾蔵、御用掛岡豊次郎、小貫忠兵衛、小島次左エ門四人来り、目下両高山村にて田水不足の段、訴出たれば、大塚村への呉水は中止せよと立服に及ばれ、堰頭連中大に困りたり、蓋し大塚村との交渉の行違いか、大塚村の詐取手段か紛争したり。いづれ水不足の爲めに大塚村にて、飯豊山穴堰に登り改修、浚いして水を引下げ計画をなしたるにより、古来穴堰は長堀の経営のもの他村に手かけさず穴堰にあらずと、長堀堰よりも、其年の穴堰当番奥村庄兵衛、竹田源右衛門、佐藤又右エ門、外に堀順番にて松原村迄登り居る江口万右エ門、人足二人、六人にて八日早朝に出発す、岩倉村より人夫三十人計り相頼み、大塚村にても三十人位引連れ、地蔵権現小屋に滞在せり、御互に意地張りの様子なりしも御沢の雪は堅く石の如く三丈もありて手の付け様なく、穴堰抜口の滝の音を聞ながら、事無く帰る。

寛政十一年(一七九〇)の七月は、ひどい旱天でどこの村も水不足に悩まされた、ことにひどかったのは大舟村や奥田村であった。この辺には水は白川よりも鬼面川よりも引けないのだが、両川ともこの年はひどい水不足でとても両村まで引上げられない。そこでいろいろ考えた末、思いついたのが飯豊の山中から小国玉川の水を白川に流すという計画である。これを藩に献策したのは奥田村の肝煎横山平左エ門であった、またそれを思いついて横山に話したのは猟師の六蔵であったという。けれども玉川の水を白川に流すには大へんな工事が必要である。飯豊山中の尾根を一つ掘り抜かねばならない。これは当時の技術から考えて並大抵の事ではない、だがこの難工の計画は当時名奉行として名高い黒井忠寄の取り上げることとなった。

(中略)

ともかく、この穴堰が完成して白川の水量が増した事は下流の諸村にとって大きな助となった。直接的に大きな影響を受ける事になったのは長堀堰参加の諸村である。

長堀堰は上・中・下の三小松の農民が大川の水だけでは旱魃に合う事が多かったため、寛永二年(一六二五)頃着手して白川の水を引き上げた用水堰である、ところがその後、高豆蔻(こうずく)・黒川・高山の三村が加堰したが、これら新加堰へ廻す水は殆んどなかった。そこで穴堰完成の翌年、文政二年(一八一九)に長堀堰を拡張してこの三ヶ村へまず水を廻すことになった。もともと黒井忠寄の案では奥田村に通じて広大な野府(やぶ)を新開する計画であった。すでに忠寄もなく、さしあたっては三ヶ村の急を救うことが先決だとなったのである。

(中略)

その後長堀堰では毎年藩役人が長堀堰頭及び人夫を引き連れ、順番に穴堰に出張浚深にあたった。安政二年より五年内、江戸より金堀り政吉というものを頼み、堰内切り下げ、梁掛け替え浚いなどをしておる。昭和十年から十二年迄、三ヶ年の継続事業として、坑道の高さ・巾の切り抜け、滝の削り取り、梁掛けの掛替、制水門、溪谷(大股沢)に針金蛇籠の堰堤設置などをした。また昭和三十一年には水路雪害の復旧工事として梁掛けの掛替え石積みなどを行なっておる。かくの如く穴堰開鑿以来、その維持管理については万全を期し、できる限りの手入れを施してきたのである。

(4)

川西町 よねざわはん 米沢藩でいちばん大きい水路「長堀堰」

長堀堰は、白川の水を遠く離れた川西町上小松・中小松・下小松地区の水田をうるおすために作られた用水路で、その水路が長いことから「長堀」と名前がついたといわれています。

完成する前の三つの地区は、町内を流れる犬川から水を引いて田んぼを作っていました。しかし、春の雪解けにはたくさんの水がありますが、田んぼに水を引く時期には水が少なくなり、下流にある下小松地区は、晴の日が続くと田んぼが干上がり、村人たちが他の所に移り住むということもありました。

このように水が少ない地域であったため、村人たちはたくさんの水が流れる白川から、水を引けないものかと考えておりました。そこで、下小松に住む島貫源兵衛が中心となり、上小松・中小松の3つの村で、藩主上杉定勝公にお願いし、1625年(寛永2年)ようやく許しをもらい工事ができるようになったのでした。

工事は、順調に進むと思われておりましたが、山のふもとまで来たとき、土がぐずれやすく、お金や作業する人々も考えていたより多かり、思つようには工事が進みませんでした。そこで、上小松と中小松の人たちは、これでは水路が完成しないと思い、工事を手引いてしまいました。しかし、下小松の人たちは、この水路を完成させなければ、みんな死

んでしまうかもしれないの思いから、途中でやめることはできませんでした。とくに、先頭に立って村人を引っ張ってきた、源兵衛は自分ではりつけ台を作り、もし失敗したら処刑してもらいたいの決死覚悟で、寝ることを忘れるほど働いたのでした。

源兵衛たちの努力により工事がようやく進み出したころ、ふたたび上小松・中小松の二つの村がかわり、1643年(寛永20年)に白川の取り入れ口から約12kmもの長さの「長堀堰」がようやく完成したのでした。この工により、米沢藩は積極的に新田開発を行い、村人たちの暮らしも豊かになってきましたが、たくさんの田んぼが作られたために水が不足し、「水争い」がたびたび起こるようになったのでした。そこで、藩は白川に水をたくさん流すため、「飯豊山穴堰」を考えたのでした。

穴堰が完成した次の年の1819年(文政2年)から長堀堰の幅を広げる工事をし、米沢藩の領内でも最大の大堰がついに完成したのでした。それからの長堀堰は、流れる水の量が倍になり、長い間水不足に苦しんでいた農民たちも、安心して農業ができるようになったのでした。



(1)「飯豊山(いいでさん)穴堰(あなせき)」の歴史は、～やまがた水と土歴史(れきし)探訪たんぼつ～というパンフレットに書かれています。